

高見順日記

十八卷

勁草書房

高見順日記 第八卷

1965年5月10日 第1刷発行 定価 700 円
1966年7月30日 第2刷発行

著 者 高 見 順

発 行 者 井 村 寿 二

東京都千代田区神田駿河台2-3

印 刷 者 白 井 倉 之 助

東京都青梅市根ヶ布 385

発 行 所 東京都千代田区 勁 草 書 房
神田駿河台 2-3
(株式会社大和出版部)

落丁本・乱丁本はお取りかえします。
© 1965 Jun Takami

精興社印刷・複製本
Printed in Japan

高見順日記 第八卷 目次

混迷と再建

昭和二十二年三月―九月	3
昭和二十三年一月―十二月	125
昭和二十四年一月―八月	253
昭和二十五年一月―十一月	351
昭和二十六年二月―五月	445

混迷と再建

——昭和二十二年三月一日～昭和二十六年五月六日——

三月一日

鎌倉大学へ出講。

新生書房で古本を買う。木村莊八「近代插絵考」(四十円)、「新版大東京案内」昭和四年、中央公論社(五十円)、結城素明「東京美術家墓所考」(五十円)、谷山隆夫「歴史的時間」(三十五円)。

秋山君来宅。小畑カンちゃん来宅。母が早速二人をつかまえて、はなをはじめ。私は書斎にこもり、チエーホフ論を書く。

三月二日

雨。

チエーホフ論を書く。

秋山、カンちゃん両君、昨夜も泊ったが、今夜も泊る。

三月三日

「チエーホフのサガレン旅行について」五十六枚書上げる。秋山君に改造社西田君のところへ届けて貰う。西田君から世界文学社へ送るのである。

上京。

実業之日本社へ行く。「文芸季刊」の座談会に出席。石川達三、中山義秀、荒正人の諸君と現代小説について語る。北原武夫も出ると聞いていたが、顔触れを見て愚劣と感じたのか、断った由。

東京日々（註Ⅱ毎日新聞社の誤記）へ行く。「サンデー毎日」の連載小説について、挿画の猪熊氏と打合わせの会。銀座七丁目の「幸楽」で。出版局長石川欣一氏、同次長尾崎氏、サンデー編輯長森川氏、同次長柴田氏、部員船戸氏出席。

婦りに、石川氏に誘われて、新橋駅裏の喫茶店へ寄る。自炊の石川氏、筋向いの佃煮屋でおかずを買う。その二、三軒先きで、人だかりがしているので、何事かと覗くと、「集団闇屋」が巡査につかまったのだという。福島から上京、さつま揚げを売りにきたという一団、十名あまりが、二人の巡査に連れられて行く。いずれもリュックを背負い、手にトランクを下けているものもある。みな貧しげな恰好なのに胸をつかれた。混んだ汽車に乗ってはるばる東京へ来るのは大変なことだったろう。——
どうして、こういう小物ばかりつかまえて、大物を黙視しているのだらう。

三月四日

書齋にこもる。

島森書店へ行く。片山敏彦「詩と文化」(三十三円。ちり紙のような汚い紙で、いやだったが、読んでおきたいので、我慢して買った)、アンドレ・ジイド全集第十三巻「プレテクスト」(新樹社版、二十五円)、シラー選集(書翰・伝記)富山房版(二十八円)、ロシア文学研究第一輯。

「展望」の小説(「わが胸の」の続き)にかかる。

三月五日

頭をはっきりさせるため、上京、全線座で「オペラ・ハット」を見る。サンデー連載の主人公と、ちょっと似ているところがある。似ないようにせねばならぬ。(留守中、「改造」天野大吉氏来訪。)すぐ帰宅。仕事にかかる。

「展望」小説十余枚下書。

三月六日

木曜なので出勤。

共立書房竹内君(本郷新氏が私に会いたいという)、「花」藤田君、渡辺勝君(小説の件)、後藤さん(もと「山の小屋」のマダム。L・Pという雑誌の編輯をいま手伝っている)、近代映画、石井柳子さん(原稿依頼。ことわる)、虹書房宮内さん(小切手五千円持参)、西川光君(四万円融通してくれという。岡沢氏と相談したが……)来訪。

中島健蔵、岩上順一両氏、「社会」の問題で著作家組合を代表して来訪。
婦人記者採用につき面談。

船山馨君来訪。北条君も誘って三人で「よし川」で飲む（七百円）。船山君、作家としての苦しみと懷疑をのべる。船山君も成長するなどと嬉しかった。行き詰れるということが大切である。北条君、風邪気味で先に帰る。船山君を元気づけようとさらに「ブーケ」へ行く。ビールを飲む（九百円の払い。二百円借金）。

三月七日

「展望」の小説に没頭。

三月八日

鎌倉大学に出講。三学期の最後。

ただちに帰宅。小説に没頭。

三宅正太郎君来宅。

三月九日（日）

曇り。

小説に没頭。日曜なので誰か来るとヒヤヒヤしていたが、誰も幸いこなかった。小説に没頭でき

でありがたかった。この頃、自宅への来客は概して減った。（社へ訪ねてくるので——）

三月十日

小説清書。「或る告白」五十八枚了。

一高生来訪。共済資金用の色紙依頼。

出社。

「展望」記者に「或る告白」を渡す。

久米、岡沢両氏と、社の従業員組合との間に結ぶ契約について相談。（川端さん欠席。）

車で「らむぼう」へ行く。昨日が招待日だったが不参。寺沢君より今日来てくれと使いがあったので行ったのだ。

三月十一日

久米さんと鎌倉駅前「カナリヤ」で落ち合い、川端家へ行く。契約についての相談。川端さんは風邪で臥床。

久米さんと出社。

社を代表して久米さん、従業員組合を代表して木村君。両者の調印。

久米さんと銀座へ出る。昼食をとる暇がなかったので空腹甚しく、胃痛を覚える。「岡田」へ行くという久米さんと別れて、三壺堂へ私は行って、二階で弁当を食べた。（途中、井上友一郎君、倉崎君、千葉君に会った。）

カンちゃんが三壺堂に来ていて、そののろけを聞く。旅の一座で一緒だった子役のお母さんが、カンちゃんの言葉でいえば「専属」の女を世話してくれたというわけだ。待合の女中をしていたとかいう女で、つまり素人淫売である。

本を買う。北村常夫訳「エリオット文学論」(三十円)、花田清輝「復興期の精神」(六十円。再版である。初版は紙が上質で、値段はもっと安かったという)、福島繁太郎「印象派時代」(四十五円)、エンゲルス・内藤吉之助訳「家族、私有財産及び国家の起源」(五十円)、ヒルベルト、中村幸四郎訳「幾何学基礎論」(二十一円)、徳田球一、志賀義雄「獄中十八年」(十六円)、内田享「魚の感覚」(七円五十銭)、浅見喜平「中等物象学習書」中学校用巻二(十五円。「わが胸の……」の参考書)

帰宅すると秋山君が来ている。「仮面」の校正をする。

三月十二日

石光葆君来訪。同君の友人が広島で喫茶店を開いたとのことで、そのための色紙を頼まれた。「苦楽」赤田君(中山義秀君令息)、「花」藤田君来訪。小説の件。鎌倉大学学生山口君来訪。

サンデー連載「天の笛」第二回を書く。一回二十枚のうち十枚しか書けない。

三月十三日

出社。

サンデーに電話し、もう一日延期をたのむ。

「花」藤田君、加藤克己君の小説を持ってくる。

「美貌」記者、原稿を取りにくる。十五日まで待ってくれと頼む。

「L・P」の後藤さん、原稿を取りにくる。十六日まで待ってくれと頼む。

ビクター文芸部員、レコードの詩を書いてくれという。

千葉潔君来る。斎藤三郎君とともに、英国代表部のレッドマンと相談の上、Anglo-Japanese Cultural Corporation を設立することになったから、援助してほしいという。

根岸国孝君来訪。

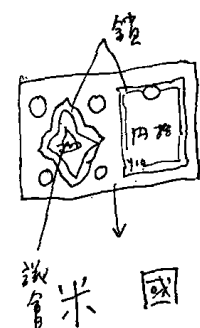
退社後、久米、川端、大森、木村の諸君と「つゞみ」へ行く。闇紙（石炭とバターで王子製紙から入手していた紙）の件で、講談社営業部長が検挙された。大地書房秋田社長が丸の内署に留置されている。王子製紙に検事が出張して帳簿をおさえた。各出版社に検挙の手がのびるだろうと、各社とも戦々兢兢。鎌倉文庫にも司直の手がのびるかもしれない。それについての相談である。

闇をやらねば出版は不可能。闇のものを買って食わねば飢死するのと同様である。——今度の検挙が拡大すると、日本の出版は事実上停止する。出版社は潰れてしまう。勝手にしろ！

帰宅後、「天の笛」を書く。

三月十四日

サンデー柴田氏来宅。「天の笛」二十枚を渡す。



昨日聞いたのだが、巷間で十円紙幣について次のような噂が飛んでいる。十円紙幣の図案は二世が描いたもので、あれは「米国」という字を図案化したものだといふのだ。

そして議会を鎖で縛っている。「拾円」も鎖でかこまれている。

三月十五日

「婦人朝日」記者来訪。原稿を取りに来たのだが、月曜まで延期をたのむ。

「美貌」記者来宅。待っていて貰って「魅力について」十三枚を書く。こういう雑文は書きたくないのだが、しつこく頼まれると、つい引き受け、あとで苦しむ。

小林圭四郎君来宅。「ロマンス」記者、今日は同志社出版部長として「婦人生活」の小説依頼で見た。短篇はしばらく勘弁してくれという。

秋山君、「仮面」の校正を持って来る。

伊藤貞助君が死んだ。不遇な人だった。時事に左のごとき記事が出ている。「——腕をさすっている」とは何事だ。見出しの「無医村の悲劇実演」というのも、何事だ。この不遇な劇作家の死に対して何たる冒瀆。

無医村の悲劇実演

無医村を主題とした映画のシナリオを書きに無医村に行ったばかりに病気でたおれても医者にかかれず死んでいった一劇作家――

長塚節の「土」を脚色して一躍有名になった伊藤貞助氏がその人、同氏はさきごろ東宝映画にたのまれて無医村映画のシナリオを書きに東北の無医村、岩手県黒沢尻にいったが去る七日午後五時流行性脳炎のため急死した、仕事の完成を目前にひかえて病気におかされしかも医者にもかかれず死んでしまった事実こそこの映画のテーマにふさわしいと十八日午後二時から帝大赤門前の喜福寺で行われる告別式を前に気の早い劇作家連中が腕をさすっている

今日から東京の廿二区制が実施された。大田区（註：大森区、蒲田区の合併名）とは何事か。台東区とは、――まるで台湾ではないか。すべてもうメチャクチャだ。

文芸春秋の匿名人物評論に私の人物評が出ている。なかなか当たっている。これも、――後日の興味のため、切り抜いておこう。三田村四郎、潮田江次と私の三人が槍玉にあげられているのだ。

私は「食えない男」となっている。私はたしかに「食えない男」だろう。だが同時に、「食える男」だ。弱気で強気だ。純情でありまた純情でない。矛盾がそのまゝ私のうちに生きている。それが「食えない」ゆえんか。

私は常に成長ということを考えている。発展ということを考えている。だから私は自分を自分で限定したくない。私もどうやら自分の限界というものはわかりかけた。しかし限界内にとどまりたくない

い。

私の限界のなかで私も文学的な仕事をすれば、一応いいものは書けるかもしれない。作品としてまとまったものが、そうすれば書けるだろう。しかし私は失敗しても、限界外に溢れ出したい。限界外の仕事に私は自分をまだ、或は常にぶつからせない。そうして大きく成長したい。発展をしたい。私は私の一生を未完成でも発展のうちに送りたい。天がもし私に寿命を与えてくれたら、完成が見られるだろうが、あと十年位で私の生涯が終るようだったら、未完成のうちに終るだろう。しかし私は絶えず歩いていたい。

高 見 順

出版会社「鎌倉文庫」の常務取締役高見順が「鎌倉文庫」から最近出した恋愛小説「今ひとたびの」は近來よく売れた本の一つである。印税もそつなく、自分の会社からたんまり取っているだろう、などという岡焼連中の下品な臆測に答えるのは、この一文の趣旨でもなく、筆者はそれを語る適任者でもない。が、高見が現代における流行作家の一人であることは、この「今ひとたびの」の売行が、おのずから物語っているよう。



流行作家高見順が目下新潮に連載中の「わが胸の底のここには」という、ややこしい標題の小説は、彼自らライフワークと気負っている作品である。敗戦以後の日本文学の水準からいって、確かにこれは注目すべき作品の一つかも知れない。この作品の中で、彼は得意とする自虐的な告白の筆をふるって、己れが皮膚を我と我が手でひん剝くような苦痛を押しこらえ、読者の前に自分の生身をさらけ出そうと努めているかに見える。そして、かかる真実さが高見に全くないとはいえない。しかし少し眼力のある読者なら、そういう高見の作家的態度

の裏に、何か人を甘くみている身ぶりを感得するだろう。甘ったれたもんだよと評する人がある。が、これはそう思う方が甘い。甘ったれているのなら可愛げがあるが、あれには、確かに人を甘く見て飲んでかかっている所がある。そうして高見自身、半ばそれを意識しているのではないか。つまり春秋の筆法を以てすれば、甘ったれていると見せかけて、実はその後ろで舌を出している食えない男が高見順なので、彼が決して凡庸な三流作家と同列でないゆえんはここにある。のみならず、彼が「鎌倉文庫」の経営者の一人として、対外的に一筋縄で行かぬ毅さと抜眼なさを見せているのにも、同じ事がいえよう。彼は有りきたりの小才子ではないのである。彼は好んで自分の気の弱さを例の調子で作中で物語るが、それは一種ひねったポーズなので、どうして／＼そんな弱気一途の男であるものか。「鎌倉文庫」の文士重役ちゃう、社員に一番煙たがられているのは高見だそうである。同年輩の社員を仮借なく叱り飛ばしたりして、憎まれ役を己れの一身に集めているという。人当りのいい久米正雄社長やおとなしい川端康成専務にはできない役を、自ら買っているのだ。とすれば、随分割の悪い役で、高見もお人好しさという事にもなるうが、果してそうか。

それにしても、株式会社「鎌倉文庫」は、ある意味では、今日存在する無数の出版社の中で最も注目されている所かも知れない。少くも「鎌倉文庫」に属しない文士諸氏からは……。

八・一五以後、滔々として交転する時代の漣は、その鋭い牙で旧き秩序を打ち砕き、世の中全体を荒々しく押し流して行った。あらゆる人々がこの狂奔する荒浪に押しまくられずに生きていこうと死物狂いになった。よしやおのおのの意思がいかに良心的であろうと、文士企業参加の流行も、大きな目でみれば、八・一五以後の自衛的な新現象の一つである。

出版会社「鎌倉文庫」が、社長に久米正雄を戴き、専務に川端康成、常務に高見順、取締役に中山義秀と「鎌倉組」を以て固め、海千山千の出版屋に伍して「人間」「婦人文庫」「社会」と三つの月刊雑誌を出し、単行本にも派手な企画を見せている図は、見た眼にまこと華やかな風景といわずばなるまい。その内実はしばらく問わず、一見隆々たる繁栄ぶりは確かに同業の作家たちを瞠目させるにたりる。よしんば、経営の実